

それぞれの一步を求めて 都立青鳥特別支援学校の挑戦

編集委員 徳山正幸

[勝負はこれから](#)

[フォローする](#)

2024年3月19日 5:00 [会員限定記事]

保存済み



東京都立青鳥特別支援学校ベースボール部の練習。久保田浩司監督（右）の「教えれば必ずできるようになる」という信念のもと、選手たちは日々うまくなっている

東京都立青鳥（せいちょう）特別支援学校（世田谷区）ベースボール部が高等学校野球連盟に加入、大会に参加できるようになったのが昨年5月。他の学校のように、当たり前前に硬式野球に取り組みたい、という選手たちの思いをくんだチームは着実に前進している。

3月8日。春の都大会初戦まで10日を切った日、放課後のグラウンドで、選手6人が久保田浩司監督、コーチとともに、内野守備の練習をしていた。「ファースト」と送球の指示の声があがり「ナイスプレー」の声が続く。「まず自分が一番大きな声を出すように意識している」と話したのは主将の白子悠樹（17）だ。



昨年、主将に任命されたときは自信がなかったという白子悠樹だが、今では率先して声を出し、チームをまとめている

3校の連合チームで初めて公式戦に臨んだ昨夏の大会後、主将に任命されたときは「正直、自分ができるのかなと思った」という。しかし、守備中の声出し、練習の締めにも全員で行う素振りの仕切りなどをみると、すっかり板についている。この主将のもと、チームは結束を強めてきた。

同校が高野連に加盟してからもうすぐ1年。知的障がいのある生徒たちの間でも野球熱の高いことを知る久保田監督が、旧養護学校に勤め始めて以来、35年の念願を果たせたものだった。

昨夏と秋の2度の大会に、松蔭大松蔭、都立深沢との3校の連合チームで臨んだ。いずれも初戦で敗れたが、公式戦に臨む緊張感は選手たちを一段違うステージに導いた。週4日の部活の日以外も、選手たちは自宅でバットを振り、体を鍛えるようになった。昨夏は敗れた2日後から、全員で練習を始めた。



校内の掲示板に張り出された昨夏の大会出場記念のポスター。大会に出る喜び、負ける悔しさを知り、選手たちは一段と成長した

「負けたのが悔しくて、次は勝つという気持ちで練習に取り組むようになった」と白子は言う。「選手たちの目の色が変わった」（久保田監督）。敗戦の味さえ知ることができなかった選手たちにとって、大きな転換点となったようだ。

初代の主将を務めた山口大河さん（18）は「チームのみんなで練習して、みんなで支え合うことが一番ためになった」と話す。この春卒業し、一般の企業で働く。一つの目標に向かい、仲間と力を合わせた経験は社会人としても生きるだろう。



創設初年度の主将を務めた山口大河さんはこの春卒業し、一般企業に就職する。社会に出て、みんなで野球に取り組んだ経験が生きているだろう

全国的にみても、障がいのある生徒が硬式野球の大会に出場した例は限られていた。特別支援学校が単独でチームを作り、硬式野球に取り組むのは異例だ。その挑戦を知った近隣の人たちも、通りがかると「頑張れよ」と応援してくれるようになった。

硬式野球のグラウンドは防球ネットを張るなど、安全管理にお金がかかる。通常100万円以上かかる打撃ケージは都立校の予算ではとても敷設できないが、同校の熱意に共感した2つの企業が寄贈してくれた。これが昨年12月。硬球を思い切り打つ打撃練習が可能になった。



青鳥特別支援学校の挑戦を後押しする企業が、値の張る打撃ケージの資材、工費を負担してくれた

打撃投手を務める監督らの投球数は1日150球ほどになる。「選手にとって打撃が一番楽しい練習」（久保田監督）ということで、真剣に打ち込む選手の顔をみれば肩の痛みも忘れる。

現在の部員は7人。この春の新入部員の数によっては、単独チームで大会に出場できる人数となる。久保田監督を補佐するコーチとして、南波健、水野亮、池端純也の3教諭が尽力している。教諭の間にも、本当は野球がしたい、という潜在的な願望が多くあることをうかがわせる。

硬式野球を教えて、指導の原理を再認識した、と久保田監督は言う。選手の可能性を信じるころから指導は始まる、ということだ。

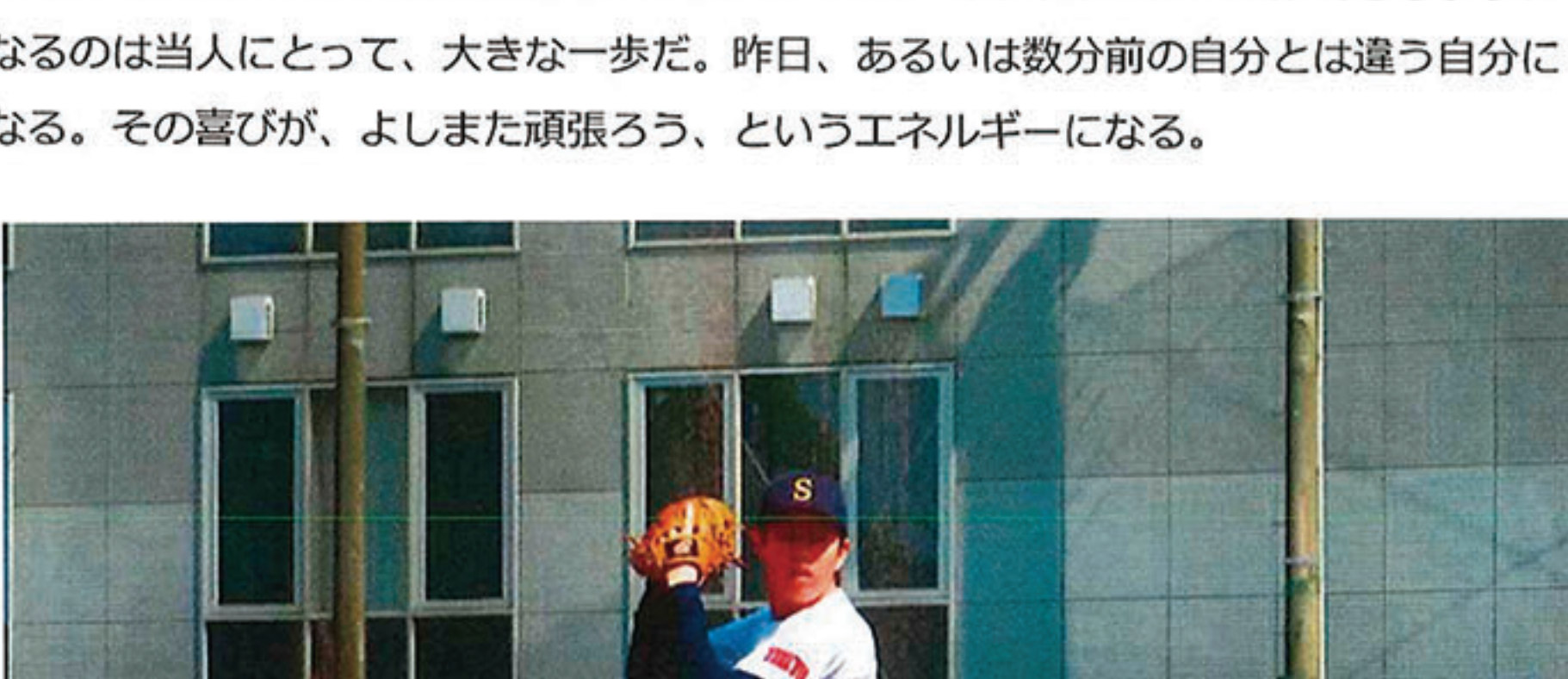


できると思い、できるようになるにはどうすればいいかを考えるころから指導は始まる。と再認識したと話す久保田監督

「こんなことがなんでできないのか、と思うのでなく、できるようになるにはどうすればいいか、と考えること。そうでないと選手はうまくなりっこない、と改めて感じた」

キャッチボールがちゃんとできない選手もいれば、なかなかバットにあたらぬ選手もいる。それでも選手個々のレベルに応じて、できるころから教えれば、間違いなくうまくなる。8日の練習でも、スイングの指導を受けてすぐ、風を切るバットの音が出るようになった選手がいた。

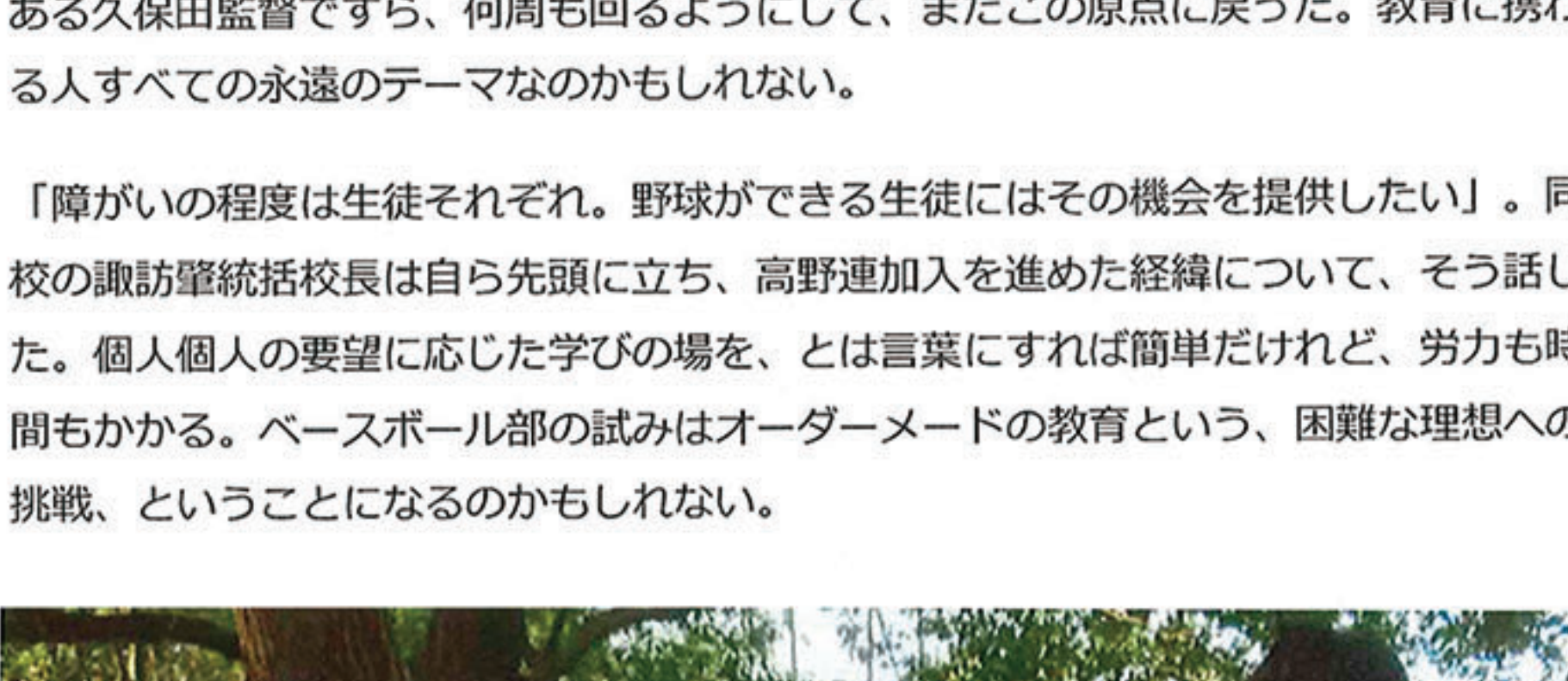
もちろん、急には何十メートルも投げ、ボールを遠くに飛ばせるようにはならない。はたからみると微々たる成長かもしれない。だが、できなかったことができるようになるのは本人にとって、大きな一歩だ。昨日、あるいは数分前の自分とは違う自分になる。その喜びが、よしまた頑張ろう、というエネルギーになる。



春の大会初戦の明法戦、2番手としてマウンドに上がった首藤理仁。青鳥の投手として大きな一歩をしるした

もし指導者が「なんでできないんだ」と、心の片隅にでも思ったら「必ず選手は感じ取り、本人も無理かな、と思うようになる」（久保田監督）。だから、できるころから始まる、というわけだが、これがいかに難しいか。長いスポーツ指導歴のある久保田監督ですら、何周も回るようにして、またこの原点に戻った。教育に携わる人すべての永遠のテーマなのかもしれない。

「障がいの程度は生徒それぞれ。野球ができる生徒にはその機会を提供したい」。同校の諏訪肇統括校長は自ら先頭立ち、高野連加入を進めた経緯について、そう話した。個人個人の要望に応じた学びの場を、とて言葉にすれば簡単だけれど、労力も時間もかかる。ベースボール部の試みはオーダーメイドの教育という、困難な理想への挑戦、ということになるのかもしれない。



青鳥のストッキングは特別支援学校の選手らと合同練習を行っている鹿嶋高（神奈川）・森林真彦監督から贈られたものだ

17日、青鳥の連合チームは初戦で敗れた。しかし、部員7人全員がベンチ入りし、2人が先発。首藤理仁（17）は青鳥の選手として初めてマウンドに立った。手応えは得た。夏までにはもっとうまくなれる――。選手それぞれ、新たな一歩を求める日々が始まった。

[「日経電子版 スポーツ」のX\(旧Twitter\)アカウントをチェック](#)



保存済み



[勝負はこれから](#)

[フォローする](#)